さいたま市の宿場町に関する研究

ー 伝統的町屋建築を対象として ー

Keywords
宿場町　浦和　中山道
町並み保存　岩槻　日光御成道

AK12109　山崎 僚大

1. 研究背景と目的

伝統的工法による木造建築物は、全国の都市に数多く存在し、歴史的、文化的価値を有するばかりでなく住宅や店舗としても有効なものであると考えられる。埼玉県さいたま市は、中山道、日光御成道が通っており、人々が行き交う宿場町として賑わいを見せた。街道沿いに歴史的建造物が残っているが、多くは建て替えられており、現在は宿場町として栄えた頃の面影が見られない。本研究では、さいたま市における宿場町の都市形成、歴史的変遷を明らかにしたうえで、さいたま市のまち並みがどのようであったのかを明らかにし、さいたま市の伝統的町屋を主とした歴史的建造物の保存活用に役立たせることを目的とする。

2. 研究方法

研究方法は以下の通りとする。

①各宿場町と町屋に関する歴史的文献、絵図を調べ、さいたま市における宿場町の都市形成、町並みに関する情報を集める。

②さいたま市に残る伝統的町屋の実測調査を行い、建築の特徴を把握する。

③①、②より、旧中山道、旧日光御成道の宿場町の都市形成、伝統的町屋の特徴について考察、比較し伝統的町屋の歴史的価値を見出す。

3. 中山道・日光御成道の変遷

3.1. 中山道について

中山道は、江戸時代に作られた五街道の1つで中山道は江戸日本橋から京都三条大橋までを結ぶ重要幹線の役割を担った街道である。慶長6年（1601）から7年間で他の4街道（東海道、日光街道、奥州街道、甲州街道）とともに整備された街道である。古くは都と東国を結ぶ東山道と称された。全長は約百三十五里二町(約534km)ととても長く中山道が整備される前は、東山道と呼ばれていた。その道中には中山道六十九次と呼ばれる69ヶ所の宿場が設けられた。浦和の町並みは南北に10町42間となっている。隣宿の蕨宿は10町、大宮は9町30間となっており、町並みの長さは同規模と言える。

3.2. 日光御成道について

日光御成道は、日光道中の脇往還として、江戸日本橋を起点に本郷追分で中山道と分かれ、岩渕宿、川口宿、鳩ヶ谷、大門宿、岩槻宿を経て幸手宿の南で千住からの日光道中と合流する5宿13里の街道である。日光御成道は、徳川家康が祀られた日光東照宮を代々徳川家康が社参する際、通行するために幕府が開通させた街道である。

4. さいたま市の宿場町について

さいたま市の中山道、日光御成道沿いの宿場町は下図の浦和宿、大宮宿、大門宿、岩槻宿の4つである。

表1　さいたま市　宿場町概要

		令制国	町並み	人口(人)	家数(軒)
中山道	浦和宿	武蔵国	10町42間	1230	273
	大宮宿		9町30間	1508	319
日光御成道	大門宿		7町23間	896	180
	岩槻宿		17町10間	3378	778

4.1. 浦和宿の沿革

浦和宿は本陣1、脇本陣3、旅籠屋15が存在していた。町の地割を元禄10年の「高見世絵図」でみると、3間から10間までのものが最も多い。間口は様々であり、地割が一定していないことから、近世初頭からの市場町として自然発達した浦和宿の町並の特徴と言える。

4.2. 大宮宿の沿革

大宮宿は本陣1、脇本陣9、旅籠屋25が存在していた。大宮宿の町割の特徴として、間口が7間から8間のものが多く、一定の間口の取り方をしていることが町割図より分かる。これは近世に入り、新しく幕府によって造られた大宮宿の特徴と言える。

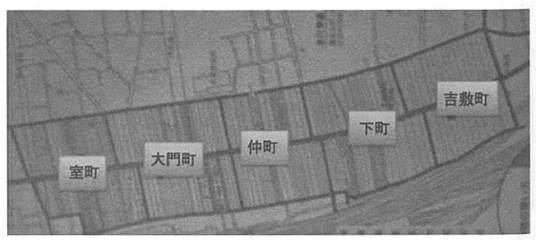


図1　大宮宿町割図(1832年)

研究指導：伊藤洋子 教授

4.3. 大門宿の沿革

大門宿ははじめ鳩ケ谷宿から直接岩槻宿へ宿継ぎが行われていたが、道程が長いために鳩ケ谷宿からの願いで、中間にある大門村が宿駅となり、大門町と称するようになった。時期は、寛文期といえる。宿並は「日光御成道宿村大概帳」によると南北7町23間で、幕末期の家並絵図面では、街道の家並は東側に52軒、西側に46軒が並び、宿全体の家の半数以上が集まっていた。

4.4. 岩槻宿の沿革

岩槻宿は市宿町と久場宿町によって構成されており、本陣、脇本陣は久保宿町に1軒ずつあった。また、旅籠屋10が存在していた。岩槻は1457年の岩槻城築城以来、武蔵の国の要所として栄え城下町としての地位を確立しし、日光社参の際に通る日光御成道の宿場町としても重要な役割を担っていた。文化・文政頃(1804～1829)からは人形の町としても知られるようになり、今でも多くの人形店が軒を並べている。

5. 調査対象建築物について

以下、埼玉県及びさいたま市による学術調査の結果を示すが学術研究にて名字を出す許可を得ている。

5.1. 青山茶舗

対象地　さいたま市浦和区岸町

旧中山道沿いに青山茶舗の店舗部分が設けられて奥に喫茶店、ギャラリーの用途を持つ楽風、その奥に住居部分が建っている。木造2階建、切妻造の建物である。青山茶舗は浦和宿の伝統的町屋の特徴である軒下に出桁が並び、これに軒桁がのる作りであり、一階は庇がついているせがい造の建物である。せがい造は、江戸時代初期に京都の町屋に流行したもので、関東地方でも江戸時代中期以後多く建てられた。町屋として街道に沿って建てられたものであり、間口が短く、奥行きの長い宿場の屋敷において商店を営むのに適した建物である。明治初期の浦和宿の特徴的な町家である。中山道浦和宿である現在の地に創業。江戸後期から明治初期に建てられたものである。玄関を入ると茶を売る店舗部分となっており、ミセ部分は間口5間×奥行４間である。その奥に10畳間、10畳間の和室が連続しており廊下が付属しており、反対側はダイドコロとなっている。

図2　青山茶舗外観

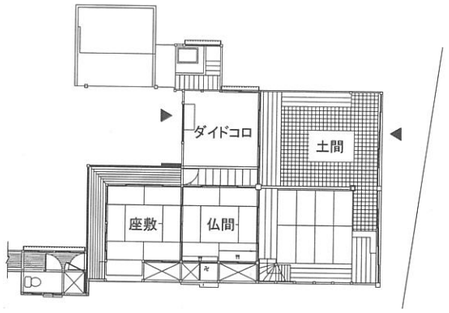


図3　青山茶舗平面図

楽風は木造土蔵造2階建の建物。当時お茶の保管に使われていたという蔵を改築し喫茶店、ギャラリーの用途に変えた。喫茶店では店で売られているお茶を出している。

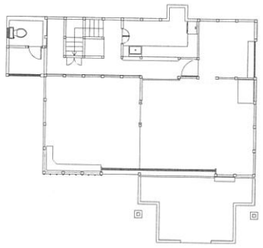


図4　楽風1階平面図

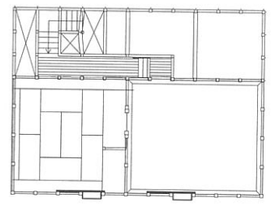


図5　楽風2階平面図

5.2. 長谷川邸

対象地　さいたま市岩槻区本町

長谷川家は日光御成道から一本入った場所に位置する明治10～20年頃に建てられた見世蔵造の町家建築である。当時は木綿問屋が商われていた。建物は見世蔵主屋、離れ、そして米蔵もあったが火災によって焼失した。昭和56年に大きな改修が行われ、下屋もこの時にとりつけられた。ミセ部分は間口4間×奥行3間半、切妻屋根の平入りである。通りに面する側から、土間、ミセと続いている。ミセの後方は主屋であり間口4間×奥行4間の平屋である。

図6　長谷川家外観

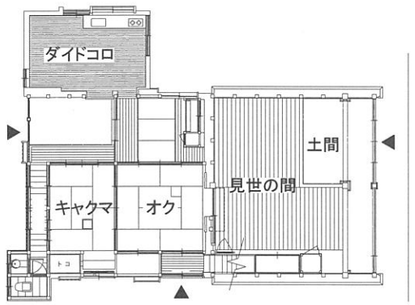


図7　長谷川家　平面図

主屋は8畳の間と6畳の間、カッテ、ダイドコロ、タタキから成りたっている。建物は典型的な見世蔵造の町家建築である。しかし細部において特徴をもった建物である。見世の間には引き下ろし戸があり、これは珍しい例である。階段棚や電話室も兼ね備えており、当時この店が栄えていたことを印象付ける。また見世蔵と主屋をつなげる引き戸はとても厚く防火戸の役割も担っており、店が焼けても主屋を守るという工夫がなされていた。主屋は平屋建であるが改修前は屋根裏部分に女中部屋があった。

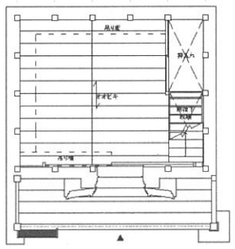


図8　文庫蔵1階平面図

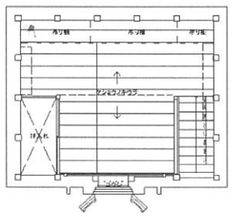


図9　文庫蔵2階平面図

6.先行研究などにおける調査対象建築物に関して

6.1. 与野の町家郡

左図は江戸末の伝統的町屋であり、右図は明治20年頃の当地の蔵造りの住宅の代表的な例である。

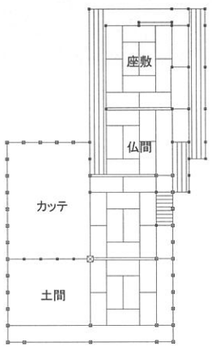


図10　井原(庸)家平面図

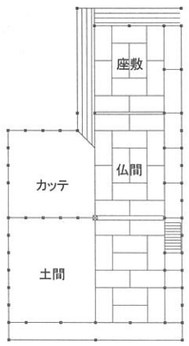


図11　井原(弥)家平面図

土間は前土間で多少平面の室数に違いがあるものも見られるが、部屋の配置関係は共通している。北側に押入れ、床の間の配置のものが多い。

井原(庸)家のミセ部分は間口5間×奥行4間、切妻屋根の平入で土蔵造でありそれに続く寄棟、平屋の居住部分から成り立っている。文政7年の「与野町絵図」に描かれた唯一の蔵造住宅例である。当地の蔵造住宅の基本となった形式でミセ部分とオクの部分まで一体として塗り込め、防火性能を高めており、ミセとオクの境に通常見られる木柄戸を有さない与野町独自の型を示すものである。

井原(弥)家のミセ部分は間口5間×奥行き3間、切妻屋根の平入りで土蔵造りであり、それに続く切妻屋根のイマ、カッテ部分、寄棟屋根のオクノマ部分から成り立っている。

7. 大門宿における復原と類型化

浦和市史・近世資料編に載っていた大門宿宿並住居絵図をもとに文政頃の大門宿の平面を明らかにし、平面の分類化を行い、町屋建築の形態を分析する。

7.1 大門宿の町並みの特徴

馬屋の位置が前にあるタイプと後ろにあるタイプがあり、建物と建物の間に道があると考えられる。浦和宿と異なり、裏道も整備されたものではなく、家並みの間にも畑や空き地がかなり残り、屋敷割を行ったか明確ではない。

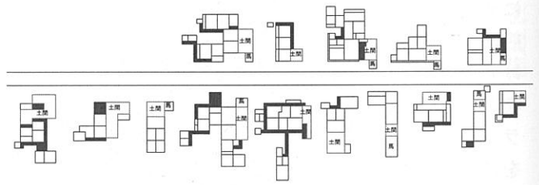


図12　大門宿宿並住居絵図復元平面図

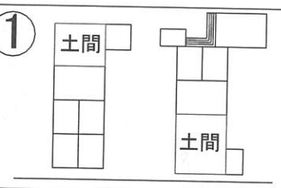
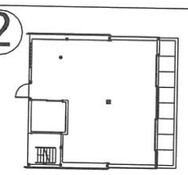
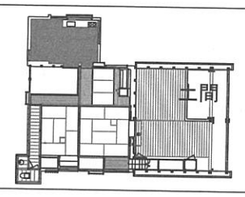
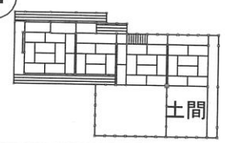
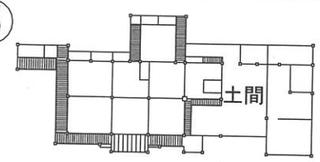
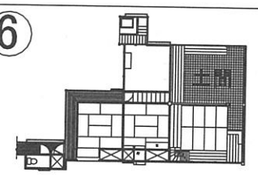
7.2. 大門宿の平面構成の考察

大門宿の平面形式の特徴として、土間の位置にばらつきがあることがあげられる。また、民家の平面の特徴として、四間取り、三間取り広間型の形式が大門宿でも見られる。さらに、四間取り裏部屋付きの民家も見られこれは埼玉県特有の平面の特徴なのではないかと考えられる。

さいたま市の民家の特徴

さいたま市の民家の形式の特徴として、①古四間取り②三間取り広間型③四間取り④四間取り裏部屋付き⑤六間取りの5型に分けることができる。①は年代的に最も古く18世紀前半が下限である。③が最も見られる形式であり、江戸時代後期の典型的な平面である。

表２　さいたま市の住居平面の変遷

	1800 1825 1850 江戸時代	1875 1900 明治時代	
日光御成道	① 	② 	③ 
	天保14年（1843年）	嘉永年間（1848～1853年）	明治10～20年（1878～1888年）
	大門宿　町屋	田中家	長谷川家
中山道	④ 	⑤ 	⑥ 
	文政年間（1818～1830年）	安政4年（1857年）	明治初期（1870～1890年）
	井原庸次家	くらしっく館	青山茶舗

8. さいたま市の住居平面の変遷

中山道沿いの町屋の平面は、表3の④文政年間の町屋である井原(庸)家の平面から見られるように、前に土間を置きその奥に部屋が続くという特徴がみられている。明治時代に入っても大きな変化はなく、基本的に前土間型の町家が多い。それに対し、日光御成道沿いの町屋は①の天保14年の大門宿の平面をみると、土間の位置にばらつきがあり、座敷を街路側に向ける東北型町屋、その逆の町屋、桁行の長い農家型間取りなど多様な平面の混成町並である。しかし、③の長谷川家は明治10～20年頃に建てられたものであり、平面形式が中山道の町家と共通する点が多くなる。

また、①~⑥で共通して言えることとして、土間が人々にとって必要な場所だったということが分かる。明治にはいるにつれて日光御成道沿いの町屋は中山道沿いで建っている町屋の平面形式に近づいてきたということが読み取れる。

9. おわりに

さいたま市の町屋建築は多種多様である。京都から発祥した町屋は全国的に広まり時代を経てその地方の特色のある町屋建築へと発展していった。特に今回は中山道、日光御成道沿いの町屋建築を中心に調査したが、宿場町の成り立ちの違いから、敷地間口の影響により町屋の平面に特色が出たりしていることが明らかになった。

今回の研究では、さいたま市の町家に関して焦点を当てたがさいたま市の中だけでも、共通する点、またその当地特有の特徴を見つけ出すことができた。

この先伝統的町屋は時代が経つにつれ衰退していく可能性が高い。しかし、保存していくことが大切であると考える。私が実際に近代和風建築調査で参加した青山茶舗のように用途を変えて活用していくことができればよりよいまちづくりに繋がるのではないかと考える。

参考文献

1) 論文「**中山道浦和宿の本陣**」　大隈喜邦　1938年
2) 論文「**宿場の街道と町家の間にみられる帯状の空間について：中山道浦和宿から本庄宿を中心に**」　宗方　保博　波多野　純　2006年
3) 中山道　http://anon.lolipop.jp/nakasendo/nk03-04/nk03-04.htm
4)「蔵造り住宅の系譜 -蔵造り住宅の詳細調査-」与野市教育委員会　2000年
5)「岩槻市史」通史編　1985年
6)「浦和市史」第三巻　近世資料編　1984年
7)「浦和市史」通史編　1984年
8)「中山道浦和大宮宿文書」　埼玉県立浦和図書館　1975年